

太宰府の文化財

409

国分地区の条里

「令和」の新年号に代わり、はや一カ月。この元号は、天平二年（730）正月に大宰府の長官（大宰帥）大伴旅人が開いた「梅花の宴」に由来があり、大きな注目を集めました。この梅花の宴には、万葉歌人として有名な山上憶良も参加していました。彼は遣唐使の一員として唐に渡って学問を学び、紀男人（梅花の宴に出席した大宰府の次官）らと共に、皇太子時代の聖武天皇の教師も務めています。当時、筑前国の長官（筑前守）として赴任し、大伴旅人も深く交流したことが万葉集からうかがえます。

山上憶良が勤めた筑前国府の具体的な場所はわかっていません。ただ、奈良時代創建の筑前国分寺があること、筑前国で編成された軍団（御笠団・遠賀団）の印章出土地が近くにあること、また近年、筑前国内の戸籍などに関わる木簡や「天平

十一年」と書かれた木簡も発見されたことから、国府が国分地区に所在した可能性が高まっています。

さて、古代の水田区画に由来する「条里」について、昨年11月の本コーナーで天満宮周辺条里を取り上げましたが、一辺約109mという方形地割の痕跡は、この国分地区でも見ることが出来ます。また、筑前国分寺跡の約400m西側の発掘調査で見つかった筑前国分尼寺跡の中心南北線は周辺条里とほぼ一致しており、国分地区の条里の起源が奈良時代にさかのぼる可能性もあります。

ここで、発掘調査で見つかった筑前国分寺の南門前を東西にのびる道路跡に注目してみましよう。条里を構成する約10m幅の主要道路で、東はおそらく古代山城・大野城から下る道と接続し、国分寺前を通って、西は水城東門に向かう官道と接続し

ます。この東西道を起点に、地図上で南へ109mずつ間隔を開けて平行線を引いてみると、およそ6区画で大宰府政庁に至る東西道（苅萱関推定地付近）に至ります。条里は一辺6区画四方を一つの単位とするため（これを「里」といいます）、おそらく政庁前の東西道が起点となつて、国分地区の条里がつくられたことがうかがえます。政庁前の東西道が起点となるのは、天満宮周辺条里と同じであり、この道の重要性が想像できます。

この条里の中に筑前国府があった可能性はありますが、他地域の例では国府の施設と条里区画が合わない場合もあるようで、条里から国府の位置を特定することはできません。ただこの地区では古代の建物跡も少なからず見つかっていますので、将来、山上憶良が勤めた筑前国府や国司館などの主要な施設が明らかになるかもしれません。

文化財課 井上 信正



国分地区の条里の推定